



斉藤とも子さん

女優

2003(平成15)年3月 社会学部社会学福祉学科卒業
2005(平成17)年3月 大学院社会学研究科
修士社会学システム専攻修了

「学び直し」が教えてくれた生きることの素晴らしさ

TVドラマ、ゆうひが丘の総理大臣などで一躍有名になり、学園ドラマのヒロインと呼ばれた70年代。その雰囲気から演じる役はいつも「優等生」だった。11歳で母を失くし、15歳で芸能界に入り、高校を中退。地に足が着かないまま、作られたイメージの中で演じる苦しみや孤独感があった。当時を振り返る。しかし、「学び直し」を決意したとき、そんな過去が吹っ切れた。38歳、3浪の未入学生た東洋大学の学生生活。そしてそれに重なるように訪れたい一つかの転機によって、斉藤さんは生きることの素晴らしさに改めて気づき、自分が大事な存在だと認められるようになったと語る。

首都圏では年ぶりの大雪となつた1月21日。待ち合わせた肌寒いホテルのロビーにコートを傍らに抱えて凍と立つ姿があった。やはり女優さん、だ。しかし挨拶を交わした途端、人懐っこい笑みを見せてこう言った。「今日は娘がセンター試験なんです。こんな雪になっちゃって、大学の皆さんも大変ですね。かつの学園ドラマのヒロインは大学受験に臨む子の母になつていた。

「学び直し」のきっかけは、神戸に住んでいた50年の阪神大震災とそれに続く仕事での出会いに端を発する。震災後間もなくして、TV番組の仕事でタイを訪ね、1ヶ月近く山岳民族の人たちと生活を共にすること。そこで、何もないところで生きる強さを見て自問させられたのです。豊かとはいえない彼らの暮らし。しかし、

「学び直し」のきっかけは、神戸に住んでいた50年の阪神大震災とそれに続く仕事での出会いに端を発する。震災後間もなくして、TV番組の仕事でタイを訪ね、1ヶ月近く山岳民族の人たちと生活を共にすること。そこで、何もないところで生きる強さを見て自問させられたのです。豊かとはいえない彼らの暮らし。しかし、



『きのこ雲の下から、明日へ』発行：ちいほと、1,600円

文明に頼り切った生活が一度の地震で一瞬に崩れ去る事実を目の当たりにしたせい。その生き方に強く引きつけられた。「タイの子どもたちは朝4時に起床して水汲みや家畜の世話をし、そのあそび学校帰ってから夜まで家の手伝い、それでも彼らは人のために役立ちたい一心で深夜に勉強するんです。学ぶ姿ってこんなに感心ものなんだ」と感じました。早くから芸能界に入り「通るべき大きな道を素通りしてしまつた」という斉藤さん。学んで、自分の力で何かを積み上げてみよう。その思いが大学受験の志となった。早くに母を亡くした後、支えてくれた方々のことが頭をよぎり、専門は社会学福祉を選んだ。

入学までの道のりは平坦ではなかった。「[る]単」の英単語がひとつも分らないところから独学で受験勉強をスタート。子どもが寝静まった深夜、仕事に向かう電車の中、これだけは覚えようと参考書をちぎりながら必死に勉強した。自分への挑戦。いま頑張らなくては、先に進めない気がした。当時社会学福祉学科にいらした大友信勝教授の著書に感銘を受けたこと、そして友人から福祉の現場には東洋大学卒の優秀な人が多いいと聞いたことから東洋大学を目標に定め、4回

目できるようやく合格できました。合格の知らせには鳴咽が止まらなかった。入学後は大学生活を優先し、興味を持った授業はすべて履修した。自分の年齢の半分同級生と、いつもお互い悩み事を相談したのよ。「分からないことは先生を追いかけていて質問したわ」。キャンパスライフの思い出を語る表情からは、学生時代への愛おしさが漏れ出ている。

入学と同時に、舞台「父と暮せば」(井上ひさし氏原作)で、被爆した娘の役が舞い込んだ。広島を訪れ、被爆した方とも会った。「この役を3年間演じるうちに広島は私にとって切っても切れないものになってきました」。被爆者の生活史が卒業論文になった。

その後、大学院に進学。ゼミの先輩を通じて、被爆者の相談活動を続けている方と知り合い、原爆投下時に母親の胎内で被爆し「原爆小頭症」という障害を負った子どもたちと家族の会「きのこ」の存在を知った。障害者を持つ子を命を削って育てた親の壮絶な姿、支援した人々の生き方。同じ痛みを持つ人が出会うのを見て歩みはじめる。それを支える人がいる。人によって人が生かされる素晴らしさが私の心を揺さぶりました。足しげく広島に通って聞き取り調査をし、同会の歩み

を修士論文にまとめた。戦後60年にあたる昨年8月、修士論文を基にしたきのこ雲の下から、明日へ出版された。きのこの方々が高齢となつた彼らの軌跡を遺したいという思いを込めた。これからは時間がある限り、一人の人間として関わっていききたい。ひたむきに生きる「きのこ」の方々が命の輝きを教えてくれたという、いしか、斉藤さんは自分を認められるようになった。これからの道にも、迷いはない。

「みなさん何か気持ちが悪く瞬間があると思うんです。心が引かれた、その瞬間がチャンスです。そのとき少しだけ頑張つて足を踏み入らせてみる、同じ思いを抱いた仲間にも出会える。それが人生の大きな転機になるかも知れません。自身を振り返って語る斉藤さんの言葉には確かな重みがあった。

別れ際、握手を交わした。その感触は「女優さんの白魚のような手ではなかった。真摯に生き方を探し、女手ひとつで2児を育ててきたたても力強い手。そのことがなぜか東洋大学で同空間を過ごしたという温もりを感じさせて、嬉しかった。

「きのこ雲の下から、明日へ」発行：ちいほと、1,600円